



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	地方農村部の昼間定時制課程における「教育的意義」II：音更高校定時制農業科生徒が書いた「意見発表文」の内容分析を通して
Author(s)	高野, 正
Citation	公教育システム研究, 16, 103-117
Issue Date	2017-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66626
Type	departmental bulletin paper
File Information	PESS_16_201706-4.pdf



地方農村部の昼間定時制課程における「教育的意義」Ⅱ ——音更高校定時制農業科生徒が書いた「意見発表文」の内容分析を通して——

高野 正*

目 次

1. はじめに
2. 内容分析の対象と方法
3. 内容分析の結果と考察
 - (1) 全体(8作品)の概要
 - (2) 6項目のカテゴリについて
 - (3) 各カテゴリと「生徒の成長」との相互関連性
4. おわりに

Key words : 定時制、農業高校、農業実習、意見発表、内容分析

1. はじめに

「昼間定時制」は、一般的にほとんど馴染みがない。高等学校における「定時制」と言えば、多くの場合「夜間定時制」が想起されよう。しかしながら、青年期の教育を“手厚く”保障するためには多様な学習条件や環境を担保する必要がある、それゆえ「夜間」だけでなく、「昼間」定時制も課程として設けられたのである。

そもそも北海道においては、終戦後、次々に「新制高等学校」が誕生するなか、地方農村部ではその特性ゆえに、働きながら学ぶ在村勤労青少年の教育の場が社会的要請となり、その結果、定時制高校が創設されていった。このとき、多くの定時制高校は、道立全日制高校の分校として開設されたが、その教育内容は必ずしも地域の要請を反映したものではなかった^{注1)}。しかし、そのなかでも、農業科を設置した定時制高校(課程)は、農業生産に従事している生徒たちに都合のよい季節性^{注2)}を採用し、それが「昼間定時制農業科」として定着し^{注3)}、その後教育内容や学習方法を充実させながら大きく発展していった^{注4)}。

だが、こうした昼間定時制農業科も、1970年代にさしかかる頃になると、農業の機械化が農家の若年労働力の必要度を低めたために、昼間定時制の4年間の学習よりも、全日制課程3年間の学習の方がより効率的であり、かつ自家営農にとっても有利であるという考え方が強まり^{注5)}、しだいに入学者数の減少を招くことになった^{注6)}。そして、さらに時代は下り、本来的な農業教育とは別の次元で、1980年代には「落ちこぼれ」といった侮蔑的なフレーズにも象徴された「学力不振」ならびに生徒指導上の「荒れ」や「非行」が社会問題化し、くわえて1990年代以降には新た

* 北海道音更高等学校教諭

な教育課題として浮上してきた「不登校（登校拒否）」「いじめ」「発達の課題」などが顕在化したことによって、定時制高校（課程）は、夜間・昼間を問わず「入学者数の確保」という“実務”と引き換えに、そうした教育諸問題の受け皿として機能していくことになる。

一方、1950（昭和 25）年に設立された音更高等学校昼間定時制課程農業科（以下、音更高校定時制農業科と記す）も、多少の濃淡はあるにせよ、上述した通り、学校の方向性や教育活動における歴史・社会的文脈は、概略同じような流れを辿り、今日に至ったと言える^{注7)}。しかし、そうした音更高校定時制農業科も 2012（平成 24）年 9 月 4 日に公表された、道教委（北海道教育委員会）の『公立高等学校配置計画』（平成 25～27 年度）において、2014 年度をもって募集停止（廃止は 2016 年度）になることが決定した^{注8)}。音更高校定時制農業科の出発点でもある、「地域農村の農業後継者の養成」といった理念や実績は、時代の進展とともに、質的・量的にも大きく様変わりしたことは事実である。しかし近年、新たに浮上してきたさまざまな教育諸問題に対応するため、音更高校定時制農業科の場合にも今日的、かつ大切な役割が期待されていたと言えるのではないだろうか^{注9)}。

そこで、本稿では、音更高校定時制農業科の生徒が書いた「意見発表文」に注目し、その内容分析を通して、そこに表明された子どもたちの“想い”に焦点を当て、音更高校定時制農業科の「教育的意義」を浮かび上がらせてみたいと思う^{注10)}。

2. 内容分析の対象と方法

今回注目した「意見発表文」とは、日本学校農業クラブの、いわゆる「三大競技」^{注11)}の 1 つで、「クラブ員が日ごろの農業学習を通して学んだり考えたりしている身近な問題や将来の問題について抱負や意見をまとめ、聴衆の前で発表し、その内容や発表のしかたを審査する競技」^{注12)}における、生徒自らが書いた作文のことである。これによって、「問題を解決する力、表現力、思考力および積極的な態度や自信をつけることができる」^{注13)}とされている。そして、今年度から区分の変更があったが、発表内容の基本的なガイドラインは表 1 の通りである。

表 1. 「意見発表」の区分・内容について

現行（2016 年度～）		従前（2015 年度まで）	
I 類 生産・流通・経営	1. 農業生物の育成や生産性向上に関する意見 2. 農業生産物の流通や消費に関する意見 3. 農業の経営や経済活動に関する意見	食料・生産	1. 食料生産や食品加工に関する意見 2. 食料や食品の経営・流通に関する意見 3. 草花や木材、林産加工などを含めた生産とそれに関わる経営や流通に関する意見
II 類 開発・保全・創造	1. 生産物の加工技術や商品に関する意見 2. 国土や地球環境の保全・創造に関する意見	環境	1. 環境の保全・創造に関する意見 2. 環境を創造する素材の生産に関する意見
III 類 ヒューマンサービス	1. 動植物や地域資源の活用に関する意見 2. 地域の食文化や伝統文化の継承に関する意見	文化・生活	1. 文化や交流、福祉に関する意見 2. 学校生活や家庭生活に関する意見

表 2. 分析対象とした意見発表文の一覧

タイトル名	分野
農業を学んで	Ⅲ類
音更高校の花	Ⅲ類
野菜を作る喜び	Ⅲ類
農業科で学んで	Ⅲ類
農業クラブと私	Ⅲ類
フラワータワーで音更町を彩ろう	Ⅲ類
最後の華	Ⅲ類
私を変えた農業	Ⅲ類

ここでは、音更高校定時制農業科3年^{注14)}に在籍している11名の生徒が書いた意見発表文（以下、作品と記す）のうち、定時制農業科で学んだことについて、自分の意見や“想い”が率直に述べられていると思われた8作品を選定し^{注15)}、分析の対象とした（表2）。

なお、「日本学校農業クラブ」についても一言説明しておく、それはFFJ（Future Farmers of Japan）とも別称され、全国の農業に関する学科や総合学科（農業系列）に学ぶ高校生の全国組織（連盟）である。それをもとに、下部組織として都道府県連盟があり、さらに各学校に単位クラブとして「農業クラブ」が組織されている。農業クラブでは、クラブ員（生徒）の自主的・主体的な活動を通して、科学性・社会性・指導性（三大目標）^{注16)}を身に付け、高めることが目標となっている。また、こうした農業クラブ活動は、農業高校・農業に関する学科（以下、農業科など農業に関する学科も農業高校に含めたものとして、単に農業高校と記す）の教育課程にも位置付けられている。

こうして、8作品を分析の対象として絞り込んだうえで、分析方法は質的内容分析のうち、ベルソン（Berelson, B.）の内容分析（Content analysis）とした^{注17)}。理由は、分析対象を「表明されたコミュニケーション」、すなわち記述の外面的意味にのみ限定し、その行間を読むといった複雑な要素を持たない方法なので、比較的操作が容易だからである^{注18)}。

そこで、その具体的な手順を示すと、まず、分析対象とした8作品における記述内容の出現を算出するための最小単位として、句点から句点までの1文章を「記録単位」とした。その際、1文章中に重文または複文がある場合は、その内容を吟味し、文意を損なわないように読み替えをして1記録単位としている。次に、これらを精読して、生徒の「音更高校定時制農業科で学んだことや体験した出来事に関して、自分の意見や“想い”」が表明されている記述部分をデータとして抽出した後、コーディング（コード化）を行い「コード（ラベル）」を確定した。さらに、それらを意味内容の類似性に従い分類（カテゴライズ）し、内容の共通性から「サブカテゴリ」を形成した。そして、内容の抽象度を高めるために同様の操作をもう一度行い、最終的に生徒の“想い”の本質（特徴）を見極め、「カテゴリ」として内容の主題を命名した（カテゴリネーム＝カテゴリ名）。

また、考察に際しては、入学当初の生徒の“想い”を知る目的で、2014年5月に実施したアンケートの結果も一部併用している^{注19)}。

3. 内容分析の結果と考察

(1) 全体（8作品）の概要

分析対象とした8作品における1作品あたりの平均文字数は1,711.9文字^{注20)}、データ数は合計で249記録単位、平均は31.1記録単位であった(表3)。そして、これら8作品の内容分析の結果、80個のデータを抽出し(抽出率:32.1%)、それらをコーディングして57個のコードを確定した。さらに、それらコードを分類して21項目のサブカテゴリをつくり、最終的には6項目のカテゴリを決定した(表4)。

表3. 8作品の文字数とデータ数

題 名	文字数	データ数
農業を学んで	1,332	32
音更高校の花	1,720	26
野菜を作る喜び	1,982	37
農業科で学んで	1,966	29
農業クラブと私	1,786	37
フラワータワーで音更町を彩ろう	1,652	28
最後の華	1,718	32
私を変えた農業	1,539	28
合計	—	249
平均	1,711.9	31.1

表4. 各カテゴリの概要

カテゴリ名	サブカテゴリ数	コード数	抽出データ数	%
農業の学習や実習に対する無関心や大変さ	4	10	13	16.3
農業の学習や実習の楽しさとやりがい	3	8	15	18.8
農業の学習や実習に関する意義の深まり	4	11	16	20.0
他者からの感謝と承認	3	5	10	12.5
学習意欲の向上と将来の展望	3	10	12	15.0
自己変容と自身の成長	4	13	14	17.5
合計	21	57	80	100.1

注) %は、各カテゴリに占める抽出データ数の割合である。

なお、カテゴリ名は【 】、サブカテゴリ名は[]、コード名は< >と表記することとし、決定した6項目のカテゴリはそれぞれ、【農業の学習や実習に対する無関心や大変さ】、【農業の学習や実習の楽しさとやりがい】、【農業の学習や実習に関する意義の深まり】、【他者からの感謝と承認】、【学習意欲の向上と将来の展望】、【自己変容と自身の成長】と命名した。また、各カテゴリに占める抽出データ数の割合は、上記の順に16.3%、18.8%、20.0%、12.5%、15.0%、17.5%となり、カテゴリ間による大きな差は見られなかった。

以下、決定した6項目のカテゴリについて、順にその結果と考察を述べる。

(2) 6項目のカテゴリについて

決定したカテゴリの1つめは、【農業の学習や実習に対する無関心や大変さ】である(表5)。それを構成するサブカテゴリは、[農業の学習や実習に興味が無かった]、[農業の学習や実習は「やりたくない」と思った]、[農業実習の作業は大変で、辛かった]、[農業実習の作業に戸惑っ

た]の4項目であった。また、コード数は10個となっており、その代表的なものは、〈はじめは農業の勉強には全く興味がなかった〉、〈入学した頃は農業に興味が無く、指示された通りに作業をこなすだけだった〉、〈農業について学び、経験するということは正直面倒くさいと思った〉、〈内心「さぼりたい」とばかり思っていた〉、〈農業実習は、辛くて「やりたくない」と思っていた〉、〈夏の実習は、暑くて虫もいて大嫌いだ〉、〈土を盛ったり、マルチングなど、今までやったことがないことがあり、どうしていいか分からなかった〉などが記述されていた。

「農業実習」は、農業高校において、農業学習の中核（コア）に位置付けられるものであり、「農業」を学ぶうえで必要不可欠な学習方法である。たとえば、農業高校では1年次、すなわち入学後直ちに必修科目として「農業と環境」や「総合実習」等^{注21)}を学習することになるが、その際、作物や野菜の栽培あるいは家畜の飼育等を通して農業実習を開始する。もちろん、こうした専門的な学習^{注22)}は中学校までにはほとんど学習経験の無いものであり、農業高校に入学してから初めての体験となる。

表5. 【農業の学習や実習に対する無関心や大変さ】

n = 13

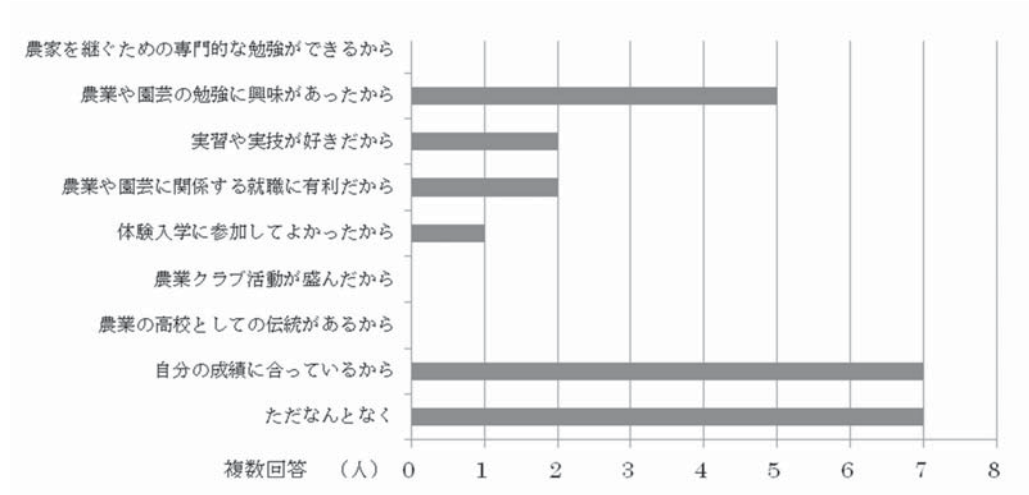
カテゴリ	サブカテゴリ	コード
農業の学習や実習に対する無関心や大変さ	農業の学習や実習に興味がなかった。	はじめは農業の勉強には全く興味がなかった。③
		入学した頃は農業に興味が無く、指示された通りに作業をこなすだけだった。
	農業の学習や実習は「やりたくない」と思った。	農業について学び、経験するということは正直面倒くさいと思った。
		内心「さぼりたい」とばかり思っていた。
	農業実習の作業は大変で、辛かった。	石拾いは、たくさん重い石や細かな石を拾い袋に入れて、どんどん重くなり大変だった。
		大量の雑草を抜き取る除草作業は、とても辛かった。
		農業実習は、辛くて「やりたくない」と思っていた。②
		夏の実習は、暑くて虫もいて大嫌いだ。
		サンドームの花壇づくりは、とても広くて大変だった。
	農業実習の作業に戸惑った。	土を盛ったり、マルチングなど、今までやったことがないことがあり、どうしていいか分からなかった。

注) 〇の数字はデータ数を表す。

しかし、「農業を学びたい」といった入学目的が明確であれば、このような農業実習も新鮮で興味・関心の高い学習になるかもしれないが、そうでない、入学目的が不明確で学習意欲が希薄な生徒(図1)にとっては、実習が単なる「労働」や「苦役」に感じられ、農業学習(実習)そのものが忌避の対象ともなり得る。つまり、本カテゴリは、生徒のそうした“想い”を裏付ける意味内容として解釈することができる。

次に、決定したカテゴリの2つめは、【農業の学習や実習の楽しさとやりがい】である(表6)。それを構成するサブカテゴリは、[農業実習は楽しかった]、[農業実習はやりがいがあった]、[野菜の成長に感動した]の3項目であった。また、コード数は8個となっており、その代表的なものは、〈農業実習はみんなで協力しながらやるので楽しかった〉、〈農業実習は座学では味わえない楽しさがあった〉、〈これまでの農業の学習で一番印象に残っているのが実習だ〉、〈真夏の実習をやり終えたときには充実感があった〉、〈野菜が立派に育った時は感動した〉などが記述されていた。

図 1. 2014 年度音更高校定時制農業科生徒 14 名の入学理由



注) 2014 年 5 月に実施したアンケート調査によるもの。

表 6. 【農業の学習や実習の楽しさとやりがい】

n = 15

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
農業の学習や実習の楽しさとやりがい	農業実習は楽しかった。	農業実習はみんなで協力しながらやるので楽しかった。②
		農業実習は座学では味わえない楽しさがあった。
		農業実習を経験できて良かった。
	農業実習はやりがいがあった。	これまでの農業の学習で一番印象に残っているのが実習だ。
		真夏の実習をやり終えたときには充実感があった。③
		農業実習はやり甲斐があった。
	野菜の成長に感動した。	播種をして初めて芽が出た時は感動した。
		野菜が立派に育った時は感動した。⑤

注) ○の数字はデータ数を表す。

本カテゴリは、1 つめのカテゴリと併置してみると、一見アンビバレントな意味内容となっている。だが、本カテゴリにおける、生徒のこうしたとらえ方の変化は、入学後、農業の学習や実習をくり返し体験し（高等学校・教科「農業」の学習は、座学と実習が密接不可分なものである）^{注 23)}、それを積み重ねていくことによって、しだいに「実習」という行為が生徒のなかで徐々に身体化 (embodiment) されていき、その帰結として表明された意味内容なのだと解釈することができる。と言うのも、生徒が身体化した実習のそうした“想い”の表出が「みんなで協力してやる」、「座学では味わえない楽しさ」、「実習をやり終えたときの充実感」、「野菜が立派に育った時の感動」と言った“コトバ”のなかに、それぞれ表現されていると思えるからである。そして、実習で直面したであろう、さまざまな「しんどさ」や「失敗」に向き合い、それを乗り越えて充実感や達成感を体感できたからこそ、農業の学習や実習を楽しく、やりがいがあるものとして感じられるようになっていったのである。本カテゴリの意味内容は、そのように解釈することがで

きよう。

次に、決定したカテゴリの3つめは、【農業の学習や実習に関する意義の深まり】である（表7）。それを構成するサブカテゴリは、[農業の良さを理解した]、[花の魅力に気付いた]、[農業が好きになった]、[農業の学習や実習に意欲的になった]の4項目であった。また、コード数は11個となっており、その代表的なものは、〈農業実習を通して、農業の素晴らしさについて分かった〉、〈農業がとても魅力的だと感じるようになった〉、〈花をつくることの意味を理解した〉、〈花の魅力に気付けたことはとても意味のあることだった〉、〈農業実習で、だんだん農業が好きになった〉、〈除草作業は、作物の栽培にとって大切な作業だということを学んだ〉などが記述されていた。

表7. 【農業の学習や実習に関する意義の深まり】

n = 16

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
農業の学習や実習に関する意義の深まり	農業の良さを理解した。	農業実習を通して、農業の素晴らしさについて分かった。②
		農業がとても魅力的だと感じるようになった。
		花の販売会で農業に対して関心を高めた。
	花の魅力に気付いた。	花は不思議で、魅力的な力があることを実感した。
		花をつくることの意味を理解した。
		花の魅力に気付けたことはとても意味のあることだった。
		完成した前庭花壇は綺麗で、心がゆたかになった。
	農業が好きになった。	農業実習で、だんだん農業が好きになった。④
	農業の学習や実習に意欲的になった。	除草作業は、作物の栽培にとって大切な作業だということを学んだ。②
		授業で基礎知識を学び、実習で管理してきたポインセチアが完売し、また頑張ろうと思った。
		安全・安心な野菜を作ろうと心掛けて実習している。

注) 〇の数字はデータ数を表す。

本カテゴリの意味内容は、2つめのカテゴリとほぼ同様の意味内容を含意しているといえる。しかし、本カテゴリはそれだけではなく、前述したように、生徒は実習においてさまざまな「しんどさ」や「失敗」に向き合い、それを乗り越えることによって、農業の学習や実習を楽しく、やりがいがあるものとして感じられるようになっていったのだが、それと同時に、「農業」に関する知識の理解や技術の習得も段々と進んだがゆえに、農業の学習や実習に関する意義も深まっていたのだと考えられる。つまり、本カテゴリの意味内容は、農業の学習や実習が「楽しい」、「やりがいがある」といったレベルから、農業の学習や実習の「意義の深まり」へと拡張された学習態度（姿勢）の変化が表現された意味内容なのだと解釈することができる。それはまた、後述する5つめのカテゴリの【学習意欲の向上と将来の展望】と6つめのカテゴリの【自己変容と自身の成長】においても、それぞれ深いところで密接に関連している。

次に、決定したカテゴリの4つめは、【他者からの感謝と承認】である（表8）。それを構成するサブカテゴリは、[お客さんから感謝され、認められた]、[普通科生徒から感謝され、認められた]、[親から感謝され、認められた]の3項目であった。また、コード数は5個となっており、〈販売実習で自分たちの作ったものが売れた時、嬉しかった〉、〈販売実習でお客さんから「ありが

とう」といわれると嬉しかった〉、〈自分たちが作った花壇を見て普通科の生徒が「綺麗だね」と言ったのを見て、誇らしい気持ちになった〉、〈自分で育てた野菜を持って帰った時の母の笑顔が忘れられない〉などが記述されていた。

表 8. 【他者からの感謝と承認】

n = 10

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
他者からの感謝と承認	お客さんから感謝され、認められた。	販売実習でお客さんから「ありがとう」といわれると嬉しかった。②
		販売実習で自分たちの作ったものが売れた時、嬉しかった。④
	普通科生徒から感謝され、認められた。	自分たちが管理したポインセチアが普通科の生徒に喜ばれて嬉しかった。②
		自分たちが作った花壇を見て普通科の生徒が「綺麗だね」と言ったのを見て、誇らしい気持ちになった。
	親から感謝され、認められた。	自分で育てた野菜を持って帰った時の母の笑顔が忘れられない。

注) 〇の数字はデータ数を表す。

中学校までにさまざまな背景や困難をかかえ、音更高校定時制農業科に入学してきた生徒^{注 24)}にとって、他者から感謝され、認められる「承認」という体験は、「何かができた」「何かを成し遂げた」といった能動的な成功体験と同じく、自己肯定観を育み、自我(ego、もしくは自我同一性である identity)を強くするうえで重要な役割を果たすといつてよい。

ところで、本カテゴリで述べられている販売実習とは、年2回(5月・12月)、学校農場・温室・ハウス等で開催される販売会のことで、生徒たちが実習(授業)で栽培管理した花卉類等を販売するイベント(学校行事)を指している。5月(春)には花壇苗・鉢花や野菜苗、培養土を、12月(冬)にはシクラメンやポインセチアを一般に向けて販売し、毎回多くの客で賑わう^{注 25)}。

生徒はこの販売会(実習)に生産物の陳列・販売(レジ)・袋詰め・運搬等に忙しく係わり、来校者との間でたくさんの交流機会をもつ。そのなかで、生産物(花卉類等)の説明やレジの処理、売れた商品の運搬等を通して、客から感謝されたり、頼られたりする体験をすることになる。そうした体験の一つ一つが高校時代の、そして農業の学習や実習での貴重な経験(思い出)となつて、自己の形成に対して、決して小さくはない影響を及ぼすと考えられる^{注 26)}。それと同様に、校内の花壇造成やポインセチアによる教室装飾(クリスマスに向けた)等も、併設されている全日制普通科生徒(ならびに教職員も含め)から注目され、たいへん喜ばれている。

このように、本カテゴリは、抽象的な概念の理解を主とする普通教科(科目)や教室内での座学ではほとんど体験することができない販売会他によつて、他者からの感謝や承認を手応えとして感じ取った様子が表現された意味内容なのだと解釈することができる。

次に、決定したカテゴリの5つめは、【学習意欲の向上と将来の展望】である(表 9)。それを構成するサブカテゴリは、[これからの学習や活動を頑張りたい]、[地域社会に貢献できる活動をしたい]、[農業の良さを地域の人たちに伝えたい]の3項目であった。また、コード数は11個となつており、〈これまでの農業科での学習や実習の体験を活かして、頑張っていきたい〉、〈私を変えてくれた農業の魅力を他の人とたちにも知ってもらうために、実習やプロジェクト活動を頑

張りたい〉、〈自分にも地域の人たちにできることがあるんだと思った〉、〈花の新しい飾り方を考案し、そのアイデアを地域に広めたい〉、〈将来は、農業の素晴らしさを地域の人たちに伝えていきたい〉、〈卒業後も地元音更町に残って、地域に花や農業の楽しさを伝える存在になりたい〉などが記述されていた。

表 9. 【学習意欲の向上と将来の展望】

n = 12

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
学習意欲の向上と将来の展望	これからの学習や活動を頑張りたい。	農業に対する興味が高まり、野菜をもっと作りたいと思った。
		これまでの農業科での学習や実習の体験を活かして、頑張っていきたい。②
		私を変えてくれた農業の魅力を他の人とたちにも知ってもらうために、実習やプロジェクト活動を頑張りたい。
	地域社会に貢献できる活動をしたい。	自分にも地域の人たちにできることがあるんだと思った。
		花の持つ魅力を活かして、地域に貢献するような活動がしたい。
		花の持つ魅力や可能性を実感し、たくさんの人を花で笑顔にしたいと思う。
		花の新しい飾り方を考案し、そのアイデアを地域に広めたい。
		フラワータワーを商品化させて、子どもからお年寄りまで、色々な方に花を楽しんでもらいたい。
	農業の良さを地域の人たちに伝えたい。	将来は、農業の素晴らしさを地域の人たちに伝えていきたい。②
		卒業後も地元音更町に残って、地域に花や農業の楽しさを伝える存在になりたい。

注) ○の数字はデータ数を表す。

農業の学習や実習の「楽しさ」や「やりがい」から、「意義の深まり」へとといった変化については、3つめのカテゴリ（【農業の学習や実習に関する意義の深まり】）のところで既述した通りである。本カテゴリの意味内容は、そうした変化に加え、さらに学習に向かう態度（姿勢）において、それをより強くした、「学習意欲の向上」に関する“想い”が表明されたものだと解釈することができる。なぜなら、これまで農業の学習や実習に対してネガティブな感情や態度であった生徒が、たとえば、「私は、これまでよりも農業に対する好奇心が高まり、もっともっと野菜を作りたいと思い、気持ちを改めました」、「農業の事について、もっと勉強をして、自分が出来ることを行い、将来は、農業のすばらしさを地域の人達に伝えられるようにしたいです」、「これからは、私を変えてくれた農業の魅力を、まだ知らない人達に知ってもらうにはどうしたら良いかを考えながら、実習や花壇造成、プロジェクト活動を頑張っていこうと思います」と述べていることから推察されよう。

そしてもう1つ、生徒にとってより大きな変化と考えられるのが、将来の見通しや展望について語られていることである。それは、高校入学に際して、取り立てて目的もなかった生徒たち（表10）が、農業を学ぶなかで、とりわけプロジェクト学習^{注 27)}を通して、学んだ学習成果をどのように活かすのか、特に地域に着目してそれぞれの目標や抱負を口にしている。「花の持つ魅力や

可能性を実感していくうちに、もっとたくさんの人を花で笑顔にしたいと思うようになりました」、「私は、卒業後も地元音更町に残って農業関係の仕事に就き、これからもずっと地域に花や農業の楽しさを伝える存在になりたいと考えています」、「フラワータワー^{注28)}を商品化させて、企業のオフィスから一般の家庭まで、幅広い場所に飾ってもらい、子供からお年寄りの方まで、色々な方に花を楽しんでもらいたい」——。もっとも、これらの一つ一つを実現できるのかどうかは別にして、しかし、こうした“想い”を語る事ができるようになった生徒たちの姿は、やや情緒的な表現を借りれば、これから（卒業後）の将来（未来）に向けて、“希望の一步”を踏み出せたようにも見えるのである。このような生徒の変容は、最後（6つめ）のカテゴリでより鮮明に浮かび上がってくる。

表 10. 2014 年度音更高校定時制農業科生徒 14 名の進学への“想い”

あなたは音更高校定時制農業科への進学をどのくらい希望していましたか。	・積極的に希望していた（5人） ・べつにどこの学校でもよかった（6人） ・本当はべつの学校に行きたかった（3人）
上記の質問に係わる自由回答の記述例	・成績できた ・勉強はしたくない。身体を動かしたかった ・農業の学習を通して、卒業生は立派な社会人へと成長したと聞いたので、自分も立派な社会人へと成長したいと思い、この学校を選びました ・頭を良くしたいから希望しました ・ランクが下だったので、普通科に行けなかったので、定時にしようと思いました ・定時制は、勉強も簡単そうだし、直感で楽しそうだったから。全日制にははいりたくなかったから

注) 2014 年 5 月に実施したアンケート調査によるもの。

最後に、決定したカテゴリの6つめは、【自己変容と自身の成長】である（表 11）。それを構成するサブカテゴリは、[農業科での経験が自分を変えた]、[販売実習によって、積極的になることができた]、[農業クラブ活動で自信をつけ、責任感を身に付けた]、[自分の成長を実感することができた]の4項目であった。また、コード数は13個となっており、<農業と係わったことで、自分自身が変なことができた>、<プロジェクト学習の成果を広めるために、自分の時間を割いてでも頑張ろうと思う自分に驚いた>、<販売実習はとても良い経験になった>、<積極的になったのは、農業科に入り、販売会などでいろんな人と接する機会がたくさんあったからだ>、<農業クラブ活動を通して、自信とか勇気を持つことができた>、<農業科で学び、遅れてもいいので、誰かと係わることで、自分をもっと成長させたい>、<将来の夢がなかったが、農業科のおかげで、「がんばればできる。」と思えるようになった>などが記述されていた。

本カテゴリは、多くの生徒が述べている通り、自分が変わり、自分の成長を実感し、内省している感想が表現された意味内容となっている。それは、音更高校定時制農業科の学習のなかで、とりわけ「農業実習」で直面したさまざまな「しんどさ」や「失敗」に向き合い、それらを乗り越えながら学び、またある時には、「販売会」において、来校したたくさんの客（言ってみれば、それは親や先生以外の身近でない他者的な大人）との交流等を通し、少なくとも生徒が充実感や達成感、さらには人から認められたという実感（承認感）を体感し、そうした体感を少しずつ内面化させたことによって、しだいに「自信」をつけていった過程の結果とみることができる。それはまた、別言すれば、生徒は音更高校定時制農業科で学び、さまざまな体験をくぐり抜けるな

かで、ある種の「成長感覚」^{注29)}をつかみ取った“姿”を表しているとも言えるだろう。

表 11. 【自己変容と自身の成長】

n = 14

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
自己変容と自身の成長	農業科での経験が自分を変えた。	農業と係わったことで、自分自身が変わることができた。
		買い物の際、花の説明をすると、母から「音更高校に入って変わったね。」と言われた。
		音更高校農業科に入って、積極的になり、他人にも話しかけるようになった。
		一年生の時は笑うことができなかったが、今は笑うことができる。
		プロジェクト学習の成果を広めるために、自分の時間を割いても頑張ろうと思う自分に驚いた。
	販売実習によって、積極的になることができた。	販売実習はとても良い経験になった。②
		販売会でお客さんと接するとポジティブになって、明るく元気になる。
		積極的になったのは、農業科に入り、販売会などでいろんな人と接する機会がたくさんあったからだ。
	農業クラブ活動で自信をつけ、責任感を身に付けた。	農業クラブ活動を通して、自信とか勇気を持つことができた。
		農業クラブ活動を通して、責任感をきたえられた。
	自分の成長を実感することができた。	たいへんな実習など、苦労の後には必ず得るものがあるって、成長させてくれた。
		農業科で学び、遅れてもいいので、誰かと係わることで、自分をもっと成長させたい。
		将来の夢がなかったが、農業科のおかげで、「がんばればできる。」と思えるようになった。

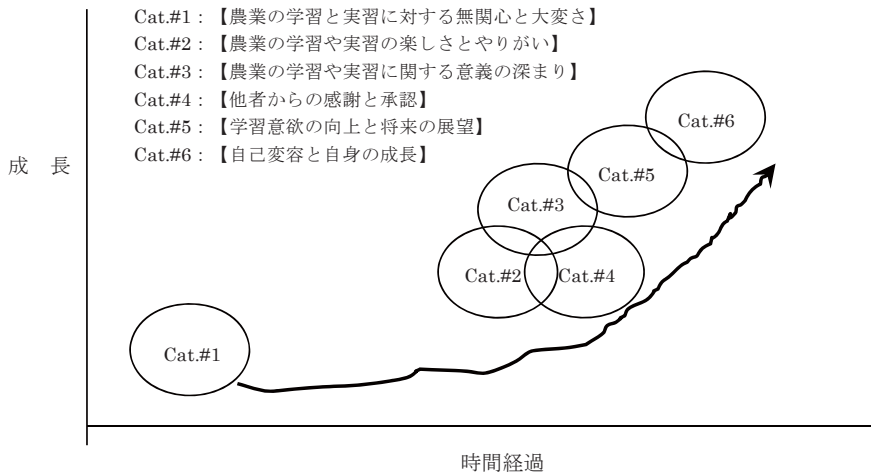
注) 〇の数字はデータ数を表す。

(3) 各カテゴリと「生徒の成長」との相互関連性

これまで、生徒たちが書き上げた8つの作品の内容分析を通して、決定した6つのカテゴリの意味内容について検討してきた。最後にここでは、それら6つのカテゴリと「生徒の成長」との位置付け、すなわち、それらの相互関連性について考察してみたい。

図2は、そのことを整理し、図示したものである。横軸に時間経過、縦軸に成長（量ないしは大きさ）をとり、決定した6つのカテゴリをそれぞれ位置付けた。時間の出発点（左端）は音更高校定時制農業科入学時であり、右端が卒業となっている。まず、生徒の入学当初の農業（教育）に対する意識や印象を表す【農業の学習や実習に対する無関心や大変さ】が左端に位置付けられる。このとき、多くの生徒は農業学習（実習）に対して関心が無かったり、消極性が顕著であったが、時間の経過とともに、すなわち農業の学習や実習の体験（学習経験）を積むにしたがい、農業（教育）に対する意識や理解の深まりが、しだいに生徒たちに見られるようになっていく。それを表す【農業の学習や実習の楽しさとやりがい】と【農業の学習や実習に関する意義の深まり】と【他者からの感謝と承認】が3年間の高校生活の中盤辺りの時期に位置付けられる。そして、農業（教育）に対するこうした意識や理解は、高校生活の終盤に入ると、やがて【学習意欲の向上と将来の展望】に対する意識へと発展し、さらには、それらの帰結として【自己変容と自身の成長】という認識にまで到達する。

図2. 各カテゴリと「生徒の成長」との相互関連性



以上のことから、仮に、このモデル（イメージ）を「成長の“軌跡”」と呼べるなら、その軌跡の進行速度はかなりゆるやかではあるのだが、けれども、その軌跡に沿って、はっきりと着実な右肩上がりの“ライン（線）”を描くことができる。そして、このフリーハンドで描かれたラインにこそ、生徒たちが音更高校定時制農業科で学ぶなかで、とりわけ農業を中心としたいくつもの実習や販売会などを体験することでつかみ取った、一人ひとりの「成長感覚」がトレースされている。それはまた、生徒たちが音更高校定時制農業科で育ち、成長していった“姿”が描出されているのと同時に、音更高校定時制農業科の「教育的意義」をあらためて確認できる有力な「手がかり」の一つとも言えるのだ。

4. おわりに

おわりに、そうした「手がかり」をよく表していると思われる生徒の作品の全文を長い引用となるのを承知のうえで、1つだけ紹介しておきたい。と言うのも、これまでの分析では、その方法論上の限界から、本来前後の文脈から理解されるはずの、すなわち行間から読み取る生徒の“想い”には、ほとんど触れることができなかったからである^{注30)}。

以下の作品は、Yさんが『私を変えた農業』と題して発表し、第60回北海道高等学校定時制通信制生徒生活体験発表大会日勝地区予選会において優秀賞を受賞したものである^{注31)}。

私が音更高校の農業科に入ることを決めた理由は、ただ親にすすめられたからでした。あのとき親が私に他の高校をすすめていたら、おそらく音更高校には入っていなかったと思います。それくらい、高校選択に対して積極的ではなく、どこでもいいとさえ思っていました。だから音更高校で農業について学び、経験するということは正直面倒くさいこととしか思っていませんでした。

実際に入学当初、農業実習は辛くてやりたくないと感じることがとても多かったです。内心サボりたいとばかり思っていました。私は元々一日中家の中でごろごろしていることが大好きであり、太陽の光が暑くて眩しい外での実習も、苦手な虫がうじゃうじゃいる畑も大嫌いなので

す。しかし、嫌々ながらも何度も実習を繰り返していくうちに、太陽の光を浴びながら体を動かし汗をかくことが、気持ちのいいことだと少しずつ思えるようになりました。外での実習には、屋内でする座学では感じるることのできない開放感があり、体は疲れていても不思議と心は軽くなっています。そして、真夏の実習後に感じるあの達成感はなかなか得ることができないものです。真夏の暑い日に、汗だくになり、喉もカラカラでへとへと状態の中、クラスみんなで協力し合って作った学校の前庭花壇。必死に作った花壇はとても綺麗で、あのときの達成感は今でも忘れられません。次の日に普通科の生徒が、私たちが作った花壇を見て「綺麗だね。」と話しているのを見かけたときは、なんだか誇らしい気持ちになりました。農業も嫌なことばかりじゃないと思い始め、虫もいつの間にか可愛いと思えるようになっていました。

さらに、私が農業に対して関心を高めるきっかけがありました。それは、花の販売会です。その日はとても寒い日だったにも関わらず、販売時間よりも前からたくさんの方が並んで待っているほど、私たちが育てた花はとても人気で、販売開始とともに次々と売れていきました。授業で基礎知識を学び、実習を通してこの日までずっと丁寧に管理をしてきたポインセチア。そのポインセチアがあつという間に完売しました。それはこれまで頑張ってきて良かったと思える光景で、これからも花を買ってくれる方々に喜んでもらえるように頑張ろうとやる気が出ました。

2年生になってからはプロジェクト活動が始まり、私は草花班に入りました。授業で習った水耕栽培についての知識を生かし、縦方向に花を飾ることができるフラワータワーを作ってみることにしました。これなら、少ない面積でたくさんの植物を育てることができます。このフラワータワーを完成させることができたなら、地域の様々な場所に設置し、音更町に彩りを与えたいという思いがありました。作成の際、ドリルやノコギリを使う作業は体力がいる作業であり、全身がとても疲れました。また、花を植えた部分の隙間から水漏れを防ぐことにもなかなか苦労し、思うようにいかないことがたくさんありました。授業時間だけでは足りず、放課後も残って作業し、なんとか完成。地域の方と一緒にフラワータワーの制作会を開いたときは、「とても良いね。」「購入したい。」等の意見をいただくことができ、班員みんなで喜びました。

入学当初は農業なんて嫌いで、サボりたいと思うくらい私にとって辛いものでしたが、今はもう、その印象はひっくり返っています。苦労の後には必ず得るものがあった、そのことが私を成長させてくれました。地域を花で彩りたいという気持ちから、自分の時間を削ってでも頑張ることができるようになった私に、少し驚いています。これからは、私を変えてくれた農業の魅力を、まだ知らない人達に知ってもらうにはどうしたら良いかを考えながら、実習や花壇造成、プロジェクト活動を頑張っていこうと思います。

現在進められている「高校配置計画」、すなわち「高校統廃合」計画は、ともすると高校への入学者数の充足を基礎として、その実績から測られる「効率」や「費用対効果」といった財政面ばかりが強調されているきらいがある。しかしながら、そうした実績では決して測ることができない「教育的な「いとなみ」」が、定時制高校（課程）や地方の小規模高校において散見する事例が数多く存在しよう。だとすれば、音更高校定時制農業科の場合も間違いなく、そうした事例の1校に数えられるはずである。それでも、音更高校定時制農業科は、2017年3月末日をもって、爾来66年の歴史に幕を下ろすことになる^{注32)}。

しかし、元来の「地域農村の農業後継者の養成」といった教育からは大きく様変わりしたとはいえ、近年のさまざまな教育諸問題に対応し、生徒の育ちや成長をはげましてきた取り組みは、教育の今日的な意味に照らして、確かに評価されてもよいし、そうしたこれまでの教育実践は、閉課（閉科）となってもなお、“輝き”を放ち続けていくのではないだろうか。

〔注〕

- 1) 田島重雄編『北海道農業教育発達史』、日本経済評論社、1980年、p.94。
- 2) もともと、西欧諸国で発達した伝統的な中等農業教育における学習形態の1つである。具体的には、冬は長く、夏は短い地方において、農作業に追われる夏～秋期間には学校での授業を行わずに作業に従事し、その代わり冬期間にまとめて授業を行うというものである。以上、田島重雄『世界の農業教育』、筑波書房、1985年、p.146。
- 3) 1952(昭和27)年当時、北海道内の昼間定時制農業科の設置状況は、道立39(うち分校23)校、町立4校、村立5(うち分校2)校となっており、合計で48校を数えた。田島重雄編、前掲書、pp.95-96より集計。
- 4) 田島重雄編、同上、pp.253-270、pp.299-304。
- 5) 田島重雄編、同上、p.373。
- 6) また、周知のことではあるが、この頃になると、より威信の高い学校(学歴)を求める“進学熱”が昂進し、「定時制よりも全日制普通科へ」といった心象が一般(父母・保護者)の間に広く浸透していたことも付け加えて指摘しておきたい。
- 7) こうした定時制農業科の存続を賭けた取り組みや教育内容の模索を簡潔に紹介したものとして、2016年5月28日付十勝毎日新聞(19)を参照のこと。
- 8) 併せて、帯広農業高校の昼間定時制農業科も募集停止となり(廃止は2017年度)、これによって道立の昼間定時制農業科はすべて姿を消すことになる。残りの農業に関する学科の昼間定時制は、ニセコ高校(緑地観光科)、幌加内高校(農業科)、東藻琴高校(生産科学科)の町立3校と、真狩高校(農芸科学科)、留寿都高校(農業福祉科)の村立2校の合計5校だけである。また、唯一の昼間定時制普通科として、市立士別東高校がある。
- 9) いわゆる「“まち”の声」として、そうした率直な意見は、2012年7月21日付十勝毎日新聞(30)、9月4日付十勝毎日新聞(20)、9月9日付北海道新聞十勝版(12)にも散見することができる。
- 10) このことについては、本稿の第1報となる、拙稿「地方農村部の昼間定時制課程における『教育的意義』——音更高校定時制農業科のアンケート結果を中心に——」、北海道大学大学院教育学研究院教育行政学研究グループ、『公教育システム研究』第13号、2014年、pp.47-54も併せて参照されたい。
- 11) 他に、農業に関する専門科目の学習や農業クラブ活動で学んだ知識・技術の定着の度合いを競い合う「農業鑑定競技会」と、プロジェクト活動で実践したことやその成果をまとめて発表し、研究した内容などについて審査する「プロジェクト発表会(実績発表会)」がある。
- 12) 日本学校農業クラブ連盟編『F F J ナビゲータ』、各年度版、発行：日本学校農業クラブ連盟事務局(印刷：東京コロニー東京都大田福祉工場)、p.27。
- 13) 日本学校農業クラブ連盟編、同上、同頁。
- 14) 音更高校定時制農業科は3修制を採用しており、全員が3年間(生)で卒業している。
- 15) 分析の対象から除外した3作品は、それぞれ『大気汚染』(Ⅱ類)、『「パインズパーク」の後継ぎとして』(Ⅰ類)、『岩手県交流プロジェクト』(Ⅲ類)と題したもので、いずれも主題に係わる現状や行為の事実を主に述べたものだった。
- 16) 「三大目標」とは、科学性：「物事や課題のおおもとにある決まりやいろいろな関係を、筋道をたてて合理的に考え、判断し、行動する態度を身につけていること」。社会性：「自分と他人で構成する組織などの社会のできごとに関心をもち、他人の意見や行動を尊重しながら、自分の考えを表現することができ、社会の一員として協力して行動する態度を身につけていること」。指導性：「民主的・合理的に判断する力を身につけ、より良い方向へ組織やグループおよび自分自身をみちびき、目的を達成しようと行動する態度を身につけていること」。以上、日本学校農業クラブ連盟編、同上、p.8。
- 17) Berelson, B./稲葉三千男他訳『内容分析』、みすず書房、1957年。
- 18) 舟島なをみ『質的研究への挑戦 第2版』、医学書院、2007年、p.42。
- 19) 本稿で対象としている2014年度入学生(それは同時に、音更高校定時制農業科における最後の卒業生となる)は、当初14名であったが、その後これまでに3名が退学し、現在11名となっている。

- 20) 意見の発表時間は7分以内と定められているので、それに合わせて作文を書くと、概ね1,800文字前後が目安となる。
- 21) たとえば、「農業と環境」の学習目標は、「農業生物の育成と環境の保全について体験的、探求的な学習を通して、農業及び環境に関する学習について興味・関心を高めるとともに、科学的思考力と課題解決能力を育成し、農業及び環境に関する基礎的な知識と技術を習得させ、農業の各分野で活用する能力と態度を育てる」とある。文部科学省『高等学校 学習指導要領』、2009年、p.129。
- 22) 高等学校の卒業要件（単位数）は、合計74単位以上であるが、専門学科（農業他）では、このうち25単位以上の専門科目を履修させることになっている。
- 23) 原則として、農業に関する科目に配当する総授業時数の10分の5以上を実験・実習に配当することになっている。
- 24) 拙稿、前掲を参照されたい。
- 25) 最後の販売会の様子は、2016年11月29日付および12月4日付十勝毎日新聞に掲載されている。
- 26) 丸山啓史は、平易な文章で綴った小論のなかで、発達保障の観点から「経験」を持つことの意義について、「魅力的な経験を通して子どもが変わること、魅力的な経験に人が支えられるということがある」と指摘している。丸山啓史「魅力的な経験をもつこと」、クレスコ編集委員会・全日本教職員組合、『クレスコ』No.190、2017年、pp.10-11。
- 27) その起源は、ルソー（Rousseau,J.J）やペスタロッジ（Pestalozzi,J.H）が唱えた「自由主義教育」の思想を、デューイ（Dewey,J）がプラグマティズム（Pragmatism）の立場から、さらに哲学的に基礎付けた「経験主義教育」の思想に基づいているとみてよいだろう。そして後に、キルパトリック（Kilpatrick,W.H）によって、プロジェクト法（Project method）として教育学的な方法論にまで高められていったものである。
実際の農業高校における教育場面では、「みずから計画を立て、計画に従って実践し、その結果を反省・評価する」（Plan-Do-See）一連の学習方法とされている。
- 28) 水耕栽培で花を縦型に飾り付ける装置のこと。この装置の開発にあたっては、帯広信用金庫が主催する「地元高校生による十勝の未来づくり応援プロジェクト」に採択され、「草花班」に所属する生徒たちがプロジェクト学習（活動）のなかで製作した。その活動内容は、2016年3月17日付北海道新聞（十勝版）および12月19日付十勝毎日新聞にも紹介されている。
- 29) 乾彰夫らによる高卒者追跡インタビューのなかで提起された「イニシエーション的経験」から得た「自信」について説明した概念だと理解し、そこからの示唆を受けている。乾彰夫編『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか 若者たちが今<大人になる>とは』、2013年、大月書店。
- 30) 他に質的内容分析では、現象学的方法やグラウンデッド・セオリーによる分析（GTA）等があるし、また、こうした課題に対処するまったく別のアプローチとしては、よりインテンシブなインタビュー（ヒアリング）調査や「物語的理解」に基礎付けられた「ナラティブ分析」などの方法も考えられるが、いずれにせよ、この点については今後の研究課題としたい。
- 31) もともと、学校農業クラブの「意見発表会」に向けて書き上げた作品だったが、学校代表とはならなかったもので、「定時制通信制生徒生活体験発表会」で発表することになった。また、ここで「優秀賞を受賞した」と記したが、本稿の研究主題において入賞したことに価値を見出すものではない。さらに一言附言しておく、入賞することはとても意味のあることだが、しかし、入賞することそれ自体が目的になると、教師による指導が行き過ぎ、生徒の自主的・主体的な活動（取り組み）の“芽”を摘み取りかねず、いわゆる「入賞主義」（運動部活動に顕著な「勝利至上主義」）に陥りやすい。実は、学校農業クラブの競技ではこうした傾向がとりわけ強い。
- 32) 閉課記念式典の様子は、2016年11月14日付十勝毎日新聞が伝えている。